リン・ハントの政治文化論

Lynn Hunt, *The Family Romance of the French Revolution.* (University of California Press, 1992)

田　野　大　輔

リン・ハントは、一九四五年生まれのアメリカのフランス革命史家である。ここでわたしが紹介したいのは、彼女のフランス革命像じたいではない。それはフランス革命についてなんらかの見解を述べる知識がわたしに欠けているからでもあるが、むしろ、ハントの方法論がフランス革命史の領域をはるかにこえる大きな意義をもっていると考えるからにほかならない。ハントは、社会学、政治学、文化人類学、文芸理論にまでおよぶ幅広い方法論を駆使して対象にアプローチし、独自の革命像を提示している。ハントの著作はすでに日本にもいくつか紹介されているので、ここではとくに最新著『フランス革命の家族ロマンス』[Hunt, 1992] を紹介しながらハントの方法論を検討し、その政治文化論的な意義を考えてみたいと思う。

ハントは『フランス革命の政治文化』のなかで、「フランス革命の主要な成果は、根本的に新しい政治文化の創造であった」[Hunt, 1984＝一九八九：三七] として、レトリックやシンボルや政治的実践によって構成される革命の「政治文化」のなかに、革命期の政治行動の論理を見いだそうとしていた。そのような論理のひとつとして本書でとりあげられているのが、「家族ロマンス (family romance)」である。つまり本書は、革命期の政治文化を組織化するカテゴリーとして家族ロマンスを位置づけたうえで、この家族ロマンスという独自な視角からフランス革命の政治の総体を把握しようとするものである。家族のイメージと権力の間のつながりを解明し、「政治の家族モデル」(本書第一章のタイトル) を提示しようとするものといってよい。その意味で本書は、家族という一見特殊なテーマを扱いながらも、その射程は家族の領域をはるかにこえて政治的なもの全体におよび、すぐれて政治文化論的な分析となっているのである。

「家族ロマンス」とは何なのか。これはフロイトが導入した概念で、主体が両親との関係を想像のなかで変更する幻想をさす。しかし、ハントはこの概念を厳密にフロイト的な意味ではもちいない。フロイトが家族ロマンスを個人心理に収斂させて、集団的次元を捨象しているのにたいし、ハントはこれを集合的・政治的な無意識をさすのにもちいて、この語を社会的政治的なものへと開き、歴史化する。したがって、家族ロマンスという語に

よってハントが意味するところのものは、ある意味でフレドリック・ジェイムソンのいう「政治的無意識」[Jameson, 1981] にちかく、本書はこの政治的無意識を革命期のさまざまなドキュメントのなかから摘出する試みといえるであろう。ハントは本書の冒頭で、家族ロマンスという語を次のように定義している。すなわち、家族ロマンスとは「革命政治の下に横たわる、家族秩序についての集合的・無意識的なイメージ」であり、「家族関係についての物語によって構造化された、一種の集合的な政治的無意識」[Hunt, 1992：xiii] である、と。革命期のフランス人はこの家族ロマンスというグリッドを通して政治を経験したのであり、彼らは家族をモデルにして新たな政治的世界を想像し、この政治的な想像力にもとづいて新たな政治秩序を構築しようとしたというのである。このようにハントは、家族ロマンスという概念によって革命の集合的・政治的想像力を分析するのであり、人々が権力の働きを集合的・無意識的にイメージする方法、およびこの想像力が政治的過程を形成し、逆にそれによって形成される方法を解明していくわけである。

まず第一章「政治の家族モデル」で、ハントはみずからの問題意識を明らかにし、家族ロマンス概念をもちいたアプローチのアウトラインを提示している。ハントによれば、アンシャン・レジーム期の絶対主義王政は家父長的家族のモデルにもとづくものであった。国王は服従のきずなによって結ばれた社会秩序全体の頂点であり、その権威は親の子にたいする家父長的権威にもとづいてモデル化されていた。したがって、革命による絶対主義の破壊は家父長制（＝親権）の破壊にもとづくものでなければならなかった、とハントは述べる。こうして、国王の処刑が家族ロマンスにおける最も重要なターニング・ポイントとされる。革命期のフランス人は、家父長的な父親によって支配された家族ロマンスにかわって、新たな革命の家族ロマンスによって、家父長的権威から引き離された政治的世界を再イメージしようとしていた。それは、政治的両親（王と王妃）が除去され、子供たち、とくに兄弟が自律的に行動するような家族のイメージであった。家父長主義にとってかわった、この新たな「兄弟愛（fraternity）」の家族ロマンスが意味するものはいったい何なのか。この問題にこたえる手がかりを、ハントはまずフロイトとジラールの理論にもとめる。そこから、家族ロマンスにとって中心的な二つのドラマ、すなわち父と子の闘争のドラマと共同体にたいする暴力の脅威のドラマとをひきだす。そのうえでハントは、革命の政治的想像力のシンボリクスのなかに、こうした革命の家族ロマンスの構造を探っていく。具体的には、小説、絵画、描画、ポルノグラフィーなどのさまざまな資料から家族にかかわる物語を紡ぎだし、革命期の政治的事件のみならず、絵画や描画や文学をも動かしている共通の歴史的・想像的過程を了解していくのである。

つづいて具体的な分析に入っていくわけであるが、第二章「よき父の盛衰」では、アンシャン・レジーム期から革命期にかけての家族のイメージ、とくに父のイメージの変化を

あとづけている。専制的な家父長的権威にたいする批判は、すでに旧体制下から始まっていたとハントは述べる。国王の没落は、こうした一般的傾向によって生みだされた「よき父」の理想の運命と密接に関連していた。王が国民の父であったなら、父のイメージの変化は王の表象に不可避的なインパクトを与えたであろう、というのだ。よき父の理想はさまざまなかたちでえがかれたが、ハントはとくに一八世紀の小説や絵画のなかに、父と子に関するこの新たな態度を探っていく。そこには、厳格で抑圧的な父から、子供を気づかうより寛容で情緒的なよき父への移行が見られ、これによって父は両義的で曖昧な人物になったという。それと並行して、子供への関心が増大する反面、それとは対照的に父の家父長的役割の重要性が減少していった。父が排除され、子供が主役として自律的に活動する世界のイメージがえがかれることによって、父の専制的な権威が疑問視されたのである。そして、そこに見られるよき父の理想の広がりと父のその後の排除が、君主制の絶対主義的基盤を致命的にほりくずし、その後の王の運命を予言することになった、とハントは主張する。じっさい、革命初期の二、三年の間、国王はよき父として言及されたが、この政治的父親の喜劇的なイメージには国王（＝父）と国民（＝子）との和解を表象する家族ロマンスの物語が含まれていた。しかし、しだいによき父への失望とその拒絶があらわれ、王と王室が侮辱されるようになる。こうして、家父長的王権のロマンスとよき父としての王のロマンスとの両方が崩壊したあとに、根本的に新しい家族ロマンスが出現することになるのだが、すでに王がよき父へと変化する過程で、王の二つの身体のうちの一つ、すなわち王権を表象する王の不滅の身体は深刻にほりくずされていたという。つまり、王自身が殺害される以前に、専制的な父親の殺害はすでに行なわれていたのだ。

第三章「兄弟のきずな」では、新たな兄弟愛の家族ロマンスの意味合いを、とくに革命期のさまざまな図像のなかに探っていく。国王自身の処刑は儀礼的犠牲を演じ、兄弟のきずなへの道を開いたとハントは述べる。国王の処刑はきわめてアンビヴァレントな反応を喚起した。処刑にたいして父殺しの罪悪感がいだかれる一方で、処刑は儀礼的犠牲をも演じ、王を非神聖化してその聖性を国民全体に与えることがはかられた。ジラールのいうように、父殺しの罪悪感は参加者すべての連帯によってのみしずめることができるのであり、国民のすべての罪を背負った王を殺すことによってのみ、共同体は純化・再聖化され、国民は勇敢なリパブリカンへと変貌することができるのだ。ハントによれば、この新たな兄弟愛の家族ロマンスは、政治的父親が除去され、兄弟が団結して輝かしく敵と戦い、共和国の理想の象徴として物語の中心におどりでるロマンスであった。しかも、そこでは兄弟は永遠に若い英雄であり、永遠に平等な兄弟のままであって、建国の父となることはなかった。じっさい、アメリカとは違って、フランスでは生きた指導者が神話化されず、革命の集団的指導が維持されたという。そのため、生きた指導者のかわりに、殉死した若い英

雄の崇拝がおこなわれた。兄弟愛こそが共和国の政治のモデルであり、そのセルフ・イメージだったのである。しかしながら、兄弟愛の家族ロマンスじたいは依然として曖昧なままであり、そこには家族関係についての根本的な不安があった。王の殺害は大きな不安を喚起しており、王を処刑しても共同体の暴力の脅威を転置できなかったために、何千ものさらなる犠牲者が彼の後につづくことになった。共和主義者は兄弟がたがいに平和にやってゆく世界を熱心にイメージしようとしたが、兄弟の間のコンフリクトは革命期の否定しがたい現実であった。この失敗を説明するために、あらゆるところに敵が見いだされることになったのである。

王＝父の死後、兄弟は二つの問題に直面したが、その一つは互いの関係についてであり、もう一つは女性との関係についてであった。第四章「あしき母」では、新たな家族ロマンスにおける女性の地位を、とくにマリー・アントワネットを対象としたポルノグラフィーのなかに探っていく。ハントは、王妃の問題と女性一般の地位の問題とが密接に関連していたことを主張する。新たな革命の家族における女性の地位の問題は、まず王妃への否定的関心となってあらわれた。王の処刑にたいしては比較的沈黙がまもられたのにたいし、王妃についてはたえずその腐敗、裏切り、偽善、インセストの罪にたいして非難がくりかえされたという。ハントはジラールの理論をもちいながら、王妃にたいする攻撃の背後には反革命派の裏切りの脅威だけでなく、女性一般にたいする脅威があったことを明らかにしていく。王妃は政治という公的領域で活動する女性の典型であり、革命という犠牲的危機にともなう性的区別の喪失の脅威を象徴するものであった。したがって、王妃への攻撃はその地位だけでなく性的区別じたいをも問題とし、性的境界を曖昧化する女性の政治参加にたいする攻撃につながることなった。こうした王妃と公的女性一般にたいする攻撃の背後に、ハントは新秩序構成における不安を読みとり、兄弟間の競争や女性の問題が解決されていなかったことを明らかにする。共和国の理想は男性の間の兄弟愛にもとづいていたが、そこでは女性は家庭の領域にとどまって、よき母として貢献するものとされた。共和国は男らしさを必要としており、そのためには貴族的堕落と公的領域の女性化とを暴力的に拒絶する必要があった。王妃と女性政治家への攻撃によって、男同士が互いのきずなを強化したのである。王妃は偽善者であり、あしき母であった。これにたいして国民は抽象的な意味でよき母であり、男性的な母ないしは出産可能な父であった。新たな兄弟愛の体制においては、母を公的活動から遠ざけて、男たちが自分で新たな秩序を生みださなければならず、そのために彼らは父と母を殺害しなければならなかったのだ。

これまでの章では集合的に共有されたイメージが扱われたのにたいし、第五章「サドの家族政治学」では家族ロマンスのサド版というべきものが扱われる。ハントは、サドの小説を革命の経験についての特異かつ極端な批評として読み、そこに革命の家族ロマンスに

ついての最も徹底的な分析を見いだす。サドのポルノグラフィーは、兄弟愛の家族ロマンスの最も極端なファンタジーを提示することによって革命イデオロギーの緊張点を明らかにし、男の間のきずな、女性の両義的な地位、インセストの恐れといった共和主義的価値をパラドキシカルに解体していく。男同士の共和主義的きずなを強めるために男色が擁護され、公的領域への女性の参加についての両義性に関しては、売春宿の公的導入によって女性すべてを公的に利用可能にすべきだと主張し、またそこから必然的に生ずるインセストを祝うべきだとされる。このような、父の不在とあしき母のもとでの放蕩な性的関係をえがいたサドの小説の背後に、ハントは犠牲的危機にともなう性的境界の曖昧化を見いだす。サドは、これを擁護することによって、兄弟愛の理想と社会との矛盾を提示し、兄弟が父のいない社会で罪を感じずに、みずからのエゴイスティックな欲望のみにもとづいて社会秩序を構築するユートピアをえがいたのである。

共和主義者たちは家族を除去しようとしたわけではなく、共和国体制の礎石として家族を復権させようとしていた。最終章「家族の復権」では、一七九〇年代後半の共和国における家族の再評価の動きをあとづけている。テルミドール後、家族の役割と家族内での父母の役割を尊重する再オリエンテーションが生じたとハントは述べる。家父長的家族が再構成されるにはいたらなかったが、これによって明確な性的境界と家族の価値を重視した、新たに道徳化された家族が出現したという。ハントは、家族法、絵画、小説などから、この再構成された家族の一貫したイメージを紡ぎだす。兄弟はいまや父になろうとしており、父は除去されずにその正当な地位を回復したが、しかし父は専制的ではなくなり、権威が弱まって、よき父として曖昧なかたちで復権されたという。また、女性は家族内のふさわしい場所につき、よき母や献身的な娘となったが、同時にその役割は以前より高く評価されるようになったという。さらにハントは、この新たな家族のなかでの子供の地位を、とくに小説と演劇を分析することで明らかにしていく。子供を中心に扱った小説や演劇では、父のいない子供が家族に頼らずに新世界で道を切り開き、自分で立派な大人になっていく家族ロマンスがえがかれ、メロドラマでは、子供がみずからの家族アイデンティティにたいする不安を解決して、善の悪にたいする勝利をもたらす家族ロマンスがえがかれたという。こうした家族ロマンスにおいては、家族が道徳的行動の枠組みであり、そこでの子供の地位が文化生活を民主化するとともに、子供を新しい社会の象徴たらしめたとハントは述べる。革命の経験を吸収してそれを作りなおすこうした文化的プロジェクトを通じて、新たな政体のモデルとしての家族が復権された。復権とはたんなる古い価値への復帰ではなく、再構成や改造を意味する。この再モデル化された家族の役割に個人が編入されることによって、個人と家族の間のもろく不安定な均衡が制度化されたのである。

以上、ハントの議論の内容を紹介してきた。わたしの紹介がその魅力を十分に伝えるこ

とができたかどうかはおくとしても、彼女の議論がフランス革命の総体を家族ロマンスという独自の観点から把握し、じつに大胆で独創的な仮説を提示しているということはいえるだろう。革命の政治文化の総体を、それとは一見何のかかわりもないように見える「家族」を説明モデルとして裁断し、その構造を探っていく鮮やかな議論には、まったくもって驚嘆すべきものがある。もっとも、歴史事象を「家族」をモデルとして説明しようとする歴史解釈じたいは、なにもハントに限ったものではない。エマニュエル・トッドは、近代ヨーロッパ史を家族制度という次元に還元して説明しており、フランスに関しては、革命イデオロギーの背後に「平等主義的家族」という基盤を見いだしている［Todd, 1990］。しかし、トッドの研究が社会制度としての家族、いわば「生きられる家族」を扱い、しかも家族を恒常的・静態的なものとしてえがいているのにたいし、ハントは家族ロマンスといういわば「語られる家族」を扱い、これを動態的なものとしてえがいている。しかもハントは、これを通してむしろ革命の政治的想像力を分析し、政治文化の総体をつかむことに主眼をおいているのである。したがって、ハントの方法論の意義を考えるうえでは、政治文化、なかでも政治的想像力のモデルとしての家族ロマンスという論点を重視しなくてはならない。

しかし、なぜ家族ロマンスなのか。政治的想像力のモデルないし政治文化を構造化する原理としては、家族ロマンス以外にもいくらでも考えられるのではないだろうか。ハントはこの点に関して次のように説明している。フランス革命というこのまったく新しい事態においては、その経験を理解するカテゴリーがほとんどなかった。そこで、政治的思考にとっての最も手近なモデルとして、家族が利用されたという。というのも、革命期においても大部分の人々は家族の内部で生活していたからである。こうしてハントは、当時のフランス人にとって、家族ロマンスこそが政治的経験を組織化するカテゴリー、ないしは政治権力を理解するためのカテゴリーを提供していたということを主張するのである。しかし、新たな政治秩序を構築するうえで家族にかんするイメージが重要であることはたしかであるが、ハントのこうした説明は、政治的想像力が家族以外のものをモデルとすることがありうるということを排除するものではない。たとえば、このような政治的想像力が言語を通じて語られるとき、想像力が依拠するモデルはつねに「物語」としての性格をもつ。この場合、家族ロマンス以外にも、いくつかの物語の構造を想定することができる。ハント自身、ノースロップ・フライの文芸理論［Frye, 1957］から、とくにコメディー、ロマンス、トラジェディーといった「筋の類型」をとりだして革命期のテクストに適用し、その分析をこころみている［Hunt, 1984＝一九八九：五八―六二］。いずれにせよ、政治的想像力というものが家族ロマンスのみに依拠するものではない以上、家族ロマンス以外のさまざまなモデルを開拓していくことがもとめられよう。

ハントの家族ロマンスの概念じたいについても、いくつかの問題点を指摘することができる。家族ロマンスとはハント自身の説明モデルなのだろうか、あるいはフランス革命の当事者たちの政治的想像力のモデルなのだろうか。ハントはこの点について非常に曖昧であり、本書の議論のなかではしばしばこの二つのレベルが混同されているように思われる。これと関連して、そもそも家族ロマンスというものは実在するものなのか、という点についてもハントは明瞭な発言をおこなっていない。ハントは、家族ロマンスの存在を証明することはできないが、家族ロマンスの概念をもちいたアプローチこそが実り豊かにフランス革命を説明しうると述べている。とすると、ハントは家族ロマンス概念の説明機能を重視しているわけであるから、家族ロマンスとは第一義的にはハント自身の説明モデルだと理解すべきであろう。しかし、ハントの実際の議論の展開においては、説明モデルとしての家族ロマンスと、当事者の政治的想像力のモデルとしての家族ロマンスとが、場当たり的に使いわけられているように思われる。さらにまた、説明モデルとして家族ロマンス概念をもちいる方法についても問題点を指摘できる。ハント自身も述べるように、本書では一貫して家族ロマンスというモデルがもちいられ、これによって革命の政治文化の統一的特徴を探ることに関心がむけられている。しかし、政治文化の統一性を重視するあまり、本書での議論はややもすると説明モデルに頼りすぎ、図式にながれて、ときとして説明が強引な印象を与えることも避けられない。文化的次元の一貫性を過度に強調した結果として、革命の経験の差異が過小評価され、社会構造や社会集団といった社会的な次元が無視されているように思われる。政治文化に焦点をあわせつつも、それが部分をなす社会との関連を重視して、文化的実践と社会的実践とのつながりに注意を払う必要があろう。

以上のような問題点を含んでいるとはいえ、ハントの政治文化論的なアプローチは大きな意義を有している。クリフォード・ギアーツは「意味の政治」と題された論文のなかで、「一国の政治はその文化の図案を反映している」と述べ、政治とは文化という「意味の構造が公に姿を現す主戦場の一つ」であるとしている［Geertz, 1973＝一九八七、II：二〇八―九］。政治の深層に位置する集合的イメージに焦点をすえたハントの方法論的立場は、まさにこうした政治と文化の関係にたいして新たに光明を投じたものといえる。政治と文化を関係づけ、文化的意味という視角から現実の政治のダイナミクスを検討することによって、ハントは政治と文化の境界に新しい研究領域を切り開いた。「政治文化」というこの新領域は、きわめて大きな発展の可能性を秘めているにもかかわらず、現段階では未開拓なまま残されている。これを方法論的に体系づける理論的枠組みの構築はまだはじまったばかりであるが、この政治文化論の豊かな土壌は、今後の政治社会学にたいしても実り多い成果を約束するものといえるだろう。

文　献

Frye, N., 1957, *Anatomy of Criticism: Four Essays,* Princeton University Press.＝一九八〇年、海老根宏ほか訳『批評の解剖』法政大学出版局

Geertz, C., 1973, *The Interpretation of Cultures: Selected Essays,* Basic Books.＝一九八七年、吉田禎吾ほか訳『文化の解釈学』Ⅰ・Ⅱ、岩波書店

Hunt, L., 1984, *Politics, Culture, and Class in the French Revolution,* University of California Press.＝一九八九年、松浦義弘訳『フランス革命の政治文化』平凡社

——— ed., 1989, *The New Cultural History,* University of California Press.＝一九九三年、筒井清忠訳『文化の新しい歴史学』岩波書店

——— 1992, *The Family Romance of the French Revolution,* University of California Press.

Jameson, F., 1981, *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act,* Cornell University Press.＝一九八九年、大橋洋一ほか訳『政治的無意識』平凡社

Todd, E., 1990, *L'invention de l'europe,* Seuil.＝一九九二、九三年、石崎晴己ほか訳『新ヨーロッパ大全』Ⅰ・Ⅱ、藤原書店

（たの　だいすけ・修士課程）